

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

海民の移動誌：西太平洋のネットワーク社会

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2018-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009109

海民の移動誌

—西太平洋のネットワーク社会

小野林太郎・長津一史・印東道子 編
昭和堂／2018年／本体 4,000円＋税

本書は国立民族学博物館の共同研究「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究—資源利用と物質文化の時空間比較」(代表：小野林太郎 2012-2015年度)の成果として出版された。アジア・オセアニア海域には、海と密接に関わりながら暮らしてきた「海民」(あるいは海人)ともよべる人々、あるいは積極的なネットワーク形成を生活基盤とする社会が各地にみられる。共同研究では、こうした海民の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式、またその分布に関する時間と空間双方の面での比較を通じて、人類学的な視点から検討してきた。

このうち時間軸においては、私たち現生人類(ホモ・サピエンス)がこの海域に登場してくる約5万年間の幅をもつ考古学的時間(実質的には約4,000年前の新石器時代以降に主眼をおく)と、約100年間の幅をもつ民族誌的時間の両軸からの検討を試みてきた。一方、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアからなる3つの海域を比較の準拠枠とした。ゆえに本書は、アジア・オセアニア海域における海民、あるいはネットワーク社会の連続性・非連続性を、地域間の差異も念頭におきつつ探るといふ、これまでの海民研究にない画期的な試みでもある。

さて本書は、前述したように海域別に3部に分け、これに序論・総論からなる1部を加え、計13本の論文と5本のコラムより構成した。海域別の3部では、いずれも考古学的時間軸と民族誌的時間軸に基づき、各海域におけるネットワーク社会の過去と現在が論じられる。

私たちはこうしたネットワーク社会のメインアクターとして、海民や海人に注目したわけだが、その研究は、日本においては民俗学や歴史学を中心に進められてきた。日本における海民や海人としては、弥生時代後期に相当する時代に中国で記された魏志倭人伝に登場する、潜水漁を得意とする白水郎(あま)や、その後の時代に海部や海女、海士として知られるアマ集団が知られる。民俗学者の宮本常一は、こうした海民を「半農半漁」集団と認識する一方、近世以降に瀬戸内海や九州沿海に暮らす家船民を、より専門的漁民としての性格が強い海人と指摘した。また1980年代以降、歴史学の視点から海民研究を展開した網野善彦は、漁業から略奪といった海賊行為にいたるさまざまな生業を完全に分化させることなく、海で暮らす「非農耕民」として生きてきた人びとを「海民」と呼んだ。

これらの先行研究に従い、海民の暮らしの基層が「半農半漁」に求められると仮定した場合、その最初の出現期として注目できるのが、農耕や家畜飼育が出現したとされる新石器時代である。東南アジアやオセアニア海域における新石器時代は、南中



国の沿岸域から台湾辺りが起源地と推測され、農耕や家畜飼育などの新石器文化をもった集団の新たな移住により、4,000~3,300年前ごろに始まったとする説が有力である。言語的には、現在の東南アジア海域とオセアニアのほぼ全域、それに台湾の先住民(あるいは原住民)の言葉はオーストロネシア語群に属す。また比較言語学の成果によれば、この語群の台湾以南への拡散期も4,000年前以降との指摘がある。ゆえに本書でも考古学的時間軸の実質的な上限を新石器時代期とした。先行研究においても最新の考古学的成果に基づきつつ、約4,000年間というタイムスケールで、総合的に議論された海民研究はない。しかしその一方で、主に物質文化の分析を軸とする考古学的なアプローチだけでは、先史時代における海民の社会や文化、その移動やネットワークの実態に迫るのは至難の業であり、その限界も明らかになった。

本書では、こうした限界を補い、海民たちの移動やネットワークの実態を鮮明かつ詳細に描き出す役割を、民族誌的時間軸から論じた章が担っている。しかし、近世期以降のさまざまな経済・技術的变化や人口変動等の影響を受ける中で展開されてきた海民たちの移動やネットワーク社会が、数千年前の先史時代における海民として想定されるような人びとのそれとまったく同一だったとは考えられない。この時代的差異は、今後どれだけデータが精緻化されたとしても、容易には乗り越えられない壁であろう。それでも考古学的資料から臆気に浮かび上がってくる先史時代の海民の移動やネットワークの背後にある原理と、近世期以降のこの約100年間に各地で暮らしてきた海民のそれとが似ている部分が多々あることを本書は明らかにする。その共通性が文化的系譜、あるいは類似した海洋環境への適応による結果に基づくのか、といった議論は今後の課題である。それでも本書は考古学・文化人類学・生態人類学・民俗学を軸とした学際的な海民研究の現在と未来を示した論集として、新たな一歩を切り開いたと自負している。ぜひ一読していただくと幸いである。

文 小野林太郎

東海大学海洋学部海洋文学科准教授。専門は海洋考古学、オセアニア・東南アジア地域研究。主な単著に『海域世界の地域研究—海民と漁撈の民族考古学』(京都大学学術出版会 2011年)、『海の人類史—東南アジア・オセアニア海域の考古学』(雄山閣 2017年、増補改訂版 2018年)、共編著に『Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions』(ANU Press 2013) などがある。